第447号 2024年05月号 bestopia.jp パリ通信 第149号

組織知能犯罪の長期計画

初めに、訂正お願いします。前号本文1行目の18年前は28年前の誤りでした。

2005年(64歳)11月のある日、ある地方銀行の某支店(神奈川県外)から電話があった。当時は私にとっては辛い時代であった。息子の離農、耳鳴りの始まり、母の召天と毎年苦しいことが連続していた。

「あなたの顧問先に「○○物産」という会社がありますか?」

全く心当たりはなかった。事情を聞くと「相当な金額を融資したのだけれども2回目からの返済がない」という。それが私とどういう関係があるのかと聞くと「申告書に貴方の署名がしてある」という。

「しかも3期分の申告書に同じように署名捺印されているという」

まず、私が質問したのは「私は県外の税務署に提出する申告書には欄外に電話番号を書くようにしてあるが、それは書いてありますか。」「それはない。書いていない。」次に「署名欄は直筆のサインですか」と尋ねた。「いやそうではない、コンピューターから印字されている。」私が更に説明したことは「私は直筆のサインもしない。なぜなら直筆の本人確認は難しいから、私はゴムの刻印で私の名前を特殊な文字で彫ってある。簡単には模造できないようにしてある」と説明した。丸い職印も簡単に模造できないように複雑に彫ってあるものを使用している。」

彼は既に警察に届けてはあるが、念の為に職印をファックスで至急送って欲しいと要求したので、早速に実行した。返事はすぐに返ってきた。「職印は一致しそうです。」ファックスではよくわからないので鮮明に押印した用紙を郵送すると約束をして、一つの質問をした。その会社の住所地はどこかを尋ねたが「捜査中で言えない」ということであった。そこで私はしつこく聞いた。「貴方は貸付係としてその所在地に行きましたか」すると彼は「事件発生後行ってみたら農家の小屋があった。」と答えるだけであった。

私には自信があったので、この事案にはあまり関心を持たなかった。先方の銀行もそれ以来何も連絡はなかった。しかし、私は背筋の寒さを感じた。時を同じくして27年間共に働いてくれた妻が引退したいと言い始め、恩師故滝沢陽一先生夫妻から「ぼちぼち厚子さんを自由にしてあげなさい。」とアドバイスもあった。確かに事務所は妻の手腕で経営されていた。私は地元では12名の職員に十分な給与が支払えないので全国を駆け回っていた。

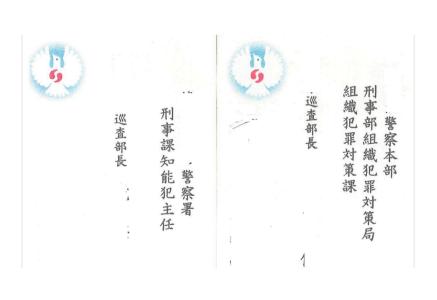
税理士としてではなく賃金体系(評価システム)の業界では先駆的な戦略で有名になりつつあった。だが、それが不正融資を起こす原因となっていることに気づき引退を考えた。

65歳であった。所内の二人の税理士に後継を依頼するも「荷が重すぎる」と断られた。 外部の若い税理士に2名声をかけたが同じように断られた。最後に賃金体系セミナーでお 世話になっていた税理士新聞社に声をかけた。僅か5日間で合併してくれる法人を紹介し てくれた。それが辻・本郷税理士法人であった。この電撃の合併も業界に影響を及ぼし た。合併のビジネスモデルができた同法人はもの凄いスピードで合併を進めここ数年は落 ち着いているようだが全国の支部は90に及んでいる。

合併の条件の一つに引き継ぎ期間として5年間は社員税理士として残ることが契約された。この期間内に私は居住地南足柄市の監査委員と同市の再生委員会の賃金専門部会の部会長を務めた。起死回生の画期的な案を強引に推し進めた結果、同市は「第二の夕張」になることが避けられた。しかし、個人的な不利益を被った役職者からは恨みを買った。今もその後遺症は残っている。

話がそれてしまったが、この社員税理士としての5年が終わろうとしていた2011年11月の 半ばに珍客の来訪を受けた。それも突然で予約なし。たまたま在席していたので面談する ことができた。珍客二人の名刺は下記の通りである。

一人は〇〇県警察本部、刑事部組織犯罪対策局・組織犯罪対策局・組織犯罪対策課A氏、もう一人は〇〇警察署、刑事課知能犯主任B氏である。詳しい説明は全てB氏の役割であったようで、A氏は一言も喋らず、領くこともなく、表情は全く不変、挨拶もしないずがはないた。顔は眉が濃く細長で目鼻立ちはしっかりして、凄みと一種の怖さが滲み出ていた。



私は笑顔で交互に二人と目線を合わせて談話に臨んだ。

B氏「貴方がこの事件に関与していないことは分かっている。結果を報告に来た。」 「事件は全国的な銀行融資詐欺で損害額は68億円である。貴方の名前が署名されたと疑 われる申告書は3年間に渡り○○税務署に毎年提出されていた。出来栄えはよく誰にも気 づかれることなく作成され提出されている。銀行が信用するのも無理はない。 貴方が関与していないことが分かったのは職印がコピーであるという鑑定の結果である。」

和やかな口調のB氏は申告書を出して私に示した。署名欄はかつて銀行員が言った通り、コンピューターからの印字で明かに私のものではないが、決め手ではなかった。欄外にも電話番号は書いていないことも決め手ではなかった。私は県外の顧問先の申告書の控えを見せて違いを話したが、その時点では、その必要はなかった。B氏は笑って、「もう、分かっていることだから証明の必要はない。明後日の新聞に乗る予定だから、一件は一段落ついている。」という。決め手はこの職印だと言って本物とすり合わせをして違いを説明してくれた。真によくできたコピーであった。このやり取りは20分ほどあったと思うがA氏は一言も話さない、ただ私を睨んでいるだけである。出したお茶にも手をつけることはなかった。

話の本筋はこれからである。

「この犯罪は10年以上の単位で長期計画されたものである。彼らはどこかのマンションの一室で小さな会計事務所らしきものを作る。従業員もいる。会計事務所で使っているコンピューターも机の上に置いてある。数社の会社の処理を毎日している。日本の各地に架空の会社を設立し登記もし、それらの会社は銀行取引もしている。毎年しっかりした決算をして税務署に提出している。設立当初から大幅な利益は出ないが3年間で銀行を信用させる程の成長企業に育て上げる。そして設備投資をする資金を申し込む。銀行も地方銀行が狙いで本店とは取引をしない。本店から遠隔の地方にある支店銀行が狙われる。今回は全国で8人の税理士が貴方と同じように利用された。我々は広域で捜査をしているが、今回の逮捕は氷山の一角で彼らは既に次の計画を実行していると考えられる。イタチごっこなのだ。」

15分位の説明を聞いていた。質問しても仕方ないことと思って頷いたり、驚いたりしているその私をA氏は黙って睨んでいる。私が関係していないことが分かっていると言いながらその目つきは犯人を見つめるようにその眼光は鋭かった。彼の声を聞くことはなかった

私は感想を簡単に述べたと同時に今月末で私は資格を抹消しようと思っている。その大きな理由はこの事件であることをつけ加えた。自分では防ぎようのない社会的な迷惑をかけることには耐えられないと訴えた。「それは貴方の自由だ」当たり前の返事が返ってきた。1時間ほどで彼らは帰って行った。二日後朝日新聞朝刊の社会面の左の隅っこに20行程の記事が載っていた。大々的な事件ではなかったかのように。

その日再びB氏から電話がかかってきた。記事は確認したかと親切に知らせてくれた。 この人は刑事らしくない人なつこい温厚そうなおじさんであった。

それにしても職印がどのようにしてコピーされたのか。

あの冷徹な態度を崩さなかったあのA氏から私は忘れていた新大阪の謎の正体が思い浮かんだ。関係付けられるエビデンスはない。しかし、B氏の説明にもあったように彼らの計画は長期で念入りに手間がかけられている。

コピーそのものは今の技術なら簡単だが、職印が漏れたのは、あの時を除いて考えられない。知能犯罪が組織化されて長期かつ巧妙になっている昨今である。

契約の満了する11月30日私は資格を抹消するべく横浜に出向いた。戻りに山下公園に足を運んだ。学生時代によく散歩し寝転がって本を読んだ懐かしい所であった。その頃はまだ米軍の基地の跡が残っており、一部鉄条網があったことを思い出した。芝生を見つけて寝転んで空を見た。起き上がり海を見た。空も海も紺碧だった。磯の香りも残っていた。矛盾をまとった自然が妙に私の心を惹きつけた。そんな郷愁にとらわれながら、過ぎし日々を懐古して恵まれた人生であったと感謝した。波乱に満ちた職業人生は波乱のままに終るかに思っていたが、大きな波がうねり寄せていたことに気がついたのは10ヶ月後であった。そして70歳の引退はできず更に12年間の戦いが始まった。神が授けてくださった賞与であった。これは今は語れない。

知能犯罪が組織化され、おそらくAIも駆使され国際的になっているのであろう。罠が至る所に張られている。リスクに満ちている。活躍する後輩に油断しないように願ってこの記事を掲載した。予防方法の一つは日報をつけること。誰と何時に会ったかだけでも、いざというときは自分を守るエビデンスとなる。個人的な日報、日記が長期間付けられていると客観的な力を持つようになる。携帯電話が生活の全てを記録するようになる日は近い。The Future is Faster than You Thinkという本がベストセラーになっている。和訳も出版されている。2030年はもう直ぐだ。

母の日・父の日を想う

5月から6月にかけて父母を想う日があります。いつもは何気なく過ごしていましたがこの頃はお墓に刻まれた召天日を見ながら思いをめぐらしていました。

2年前にいただいた一枚の年賀状が忘れられず、密かに心にあたためていました。 その歌には私自身の父母への想いが重なり、いつか公にさせて頂きたいと願っていました。 作者は織野雅夫さん。

(1998年「素晴らしき日々へ」の共同執筆者・香川県観音寺在住)

ひとすじに 歩みし父の 寡黙なる 想い偲びて 香焚き祈る。

もろびとと 苦楽を分かち 耐え抜きて 菩薩の如く 母旅立ちぬ。

父の歌

父君の面影を映し出しているのでしょう、実直さ、誠実さに溢れています。私よりも20歳位若いにもかかわらず近寄りがたい峻厳さをもっています。父君へ尊敬の念がよく出ていると思います。「香焚き祈る」に感謝の念が痛く感じられます。歌人は何気なく父君を歌っていますが、私は彼自身をよく現していると感じています。独立自尊の人です。

母の歌

母君の生き様が素直に歌われています。優しいリズムが響きます。母君の忍耐強さを日々 実感してきた歌人の観察力もすごいです。「耐え抜きて」が歌の真ん中にあり、しかし 「菩薩の如く」旅立たれた。歌人の自慢の母君であったのでしょう。今にも目前に母君が 現れそうな感じがします。織野さんの忍耐力はここにあったのだと納得の一句です。

このような歌を両親に捧げることができる人はなんと幸せな人でしょう。 織野さんのこれらの歌を契機にして私も両親の墓の前に立って刻印されている年月を見つめました。

父は1962年11月(57歳) 母は2004年2月(93歳)です。

大学3年の春、苦労ばかりだった父の背中を流したとき、今にも折れそうな細さは忘れることができません。その6ヶ月後に召されました。唯一の楽しみは私の卒業、それも待てずに。我が家は絶望の時でした。父の笑顔は1歳の私を抱いた写真だけです。脳裏に焼きついた写真です。

母は3人の子を育てるために65歳まで働きました。その後28年私たちと同居しました。 初めての入院生活は6日間、妻の24時間の手厚い看病に見守れて召されました。その日は 税務調査のため私は自宅で床についていました。母の遺言を実行したのです。「他人に迷 惑をかけてはいけない。仕事を最優先すること」幸いに調査会社が地元でしたので、調査 の合間をぬって葬儀式の準備をしました。

右の文字は1ヶ月前に母が書いた絶筆です。「世路有風波 人心如海水」です。70歳から始めた独学の一筆です。ベストピア第203号から転写しました。

今年は父の召天から62年、母は20 年になります。

母が83歳の時に私はそれまで以上に 木々のあるところに新築をしまし た。建築会社の人が母のために階段 に上がる手すりをつけてくれまし た。

「母のため 作りし手すりは 我がためにあり」 織野さんの歌を重ねて父母に感謝です。

織野さん、ありがとう。

パリ通信・第149号

ラ・ロッシェルの洗礼式

5月は日本と同じくフランスも大型飛び石連体で多くの人が動く。1日(水)メーデー祝日、8日(水)第二世界大戦終戦記念日、8日(木)キリスト昇天祭の祭日で5日仕事を休むと12連休が取れるカレンダーである。今年は「復活祭」(移動祭日)から40日後の「キリスト昇天祭」が終戦記念日の翌日になったことで8日から12日まで5連休を取るのが一般的でフランス各地が観光で賑わっていた。さらに「復活祭」から50日後の「聖霊降臨祭」月曜日(祭日)があり、5月は夏のバカンスを外してフランス人が働かない時期である。

また5月、6月は木々の緑が青々と茂り、初夏の太陽にも恵まれ、結婚式や洗礼式が最も多い。フランスの結婚式と洗礼式は土曜日に行われるのが一般的で、11日(土)ラ・ロッシェルで洗礼式に招かれる機会を得た。パリからポワチエ、二オールを経由して西南に400km離れた街で列車で3時間半の大西洋に面した街である。

1980年代後半フランス留学時から お世話になっているフランス人夫妻 (ジャン・イヴとブリジット) の長男 (オリヴィエ) に女の子が 誕生し、1歳になるの待って洗礼式が行われた。長男オリヴィエはパリ生まれでソルボンヌ大学に留学中だった中国人ユと結婚、ロンドンに移住し金融機関の仕事をしている。

昨年4月に生まれた女の子はフランス名シャルロット、イギリス名アリス、中国名シャシャで英仏の



エクセター o

二重国籍だ。洗礼式は祖父母が準備する行事だそうで、オリヴィエの両親ジャン・イヴとブリジットが式の手配をしていた。そもそもジャン・イヴがパリ「INALCO」(フランス国立東洋言語文化学院)(通称イナルコ、ラングゾと呼ばれる国立大学)で日本語を学んでいたのが私たちが知り合うきっかけだった。

ジャン・イヴのお父さんはフランス海軍の上層で横浜、長崎など日本をよく知っていて、 ジャン・イヴはその影響で日本贔屓になった。イナルコの卒業論文は「勝海舟」で、「咸 臨丸」に乗って太平洋を横断し、アメリカを視察してきた幕末の国際人勝海舟に興味を持ったそうである。論文はフランス語だったが、幕末の資料など日本語文献を一緒に読む手伝いをするのが縁の始まりだった。同じくイナルコでタイ語を学んでいたブリジットと知り合い結婚した。

今年90歳になるブリジットのお父さんは現役中はイギリスの石油タンカーの船長で世界の港をよく承知していて「横浜港で雨に遭った時、美しい日本女性が傘を差し掛けてくれて日本の大ファンになった」そうである。海が大好きでフランスの高度成長期1960年代にラ・ロッシェルの開発地に大きな庭付き一戸建てを購入された。

ラ・ロッシェルのサクレクール教会





洗礼式の様子



1962年から1968年ドゴール大統領下首相を務めたジョルジュ・ポンピドゥ(1911-1974)(ドゴール大統領の後継者として1969-1974大統領)時代は日本に次いでフランスが高度成長を成し遂げた時で、高速道路、パリCDG空港、フランス各地に原子力発電所ができた。ラ・ロッシェルの家が完成した1967年ブリジットのお父さんが接木をしたという銀杏が庭に大きな陰を作っていて家族の集いの場になっている。

シャルロットの洗礼式に家族4世代が集まり、洗礼後の会食は祖母に当たるブリジットが準備し、出席してくれた人にはシャルロット(Charlotte)の頭文字「C」を刺繍した小袋に詰めた「ドラジェ」(アーモンドコンフェクション)が配られた。洗礼式はラ・ロッシェル教会区の一つである「サクレ・クール教会」で18:30から行われた。ローマ・ビザンチン

様式の新しい教会で、明るい内部正 面にキリストの心臓を配した赤いス テンドグラスが印象的である。洗礼 は一般のミサに組み込まれ1時間半 の長い式典で、毎年5月11日に火を 灯すようにと大きな長い蝋燭が渡さ れた。洗礼の代父はオリヴィエの弟 チボーでアムステルダムでアメリカ のIT企業技師として勤務、代母はユ の同僚でロンドンに住むインド人ス リー(サンスクリット語で美の意 味)。今の若いフランス人世代は給与 やより良い生活環境を求めて進んで 海外にも出るが、家族を大切にして ランス文化と伝統が受け継がれてい くのを見る思いだった。

写真は左から父、代父に抱かれるシャルロット、代母 母

